季嘗
詳解改正月令博物筌 六月部

七

六月部目録

△印ある八能諸の季と持物と

○養生の法○壓雨の考○米の豊凶
○妙薬の方其外人家皇法の良々よあり少人目録よい多るさん

六月

卦 月令 調子 六一丁
陰陽生 異名

△小暑節 六二丁
△大暑中 六二丁

日令

此部ふい六月日の定りとる支支の定りとる事とあるす

△氷室 △氷餅 六三丁
△祇園日の御飯供を 六三丁
△献醴酒 六三丁
△一夜酒 六四丁
△勝曼祭 六四丁
△冨士詣 六四丁
△六月 命日 六四丁
△天駄節 六四丁
△裏神麹 季八五月 六四丁
△水貯 六四丁
△祇園會 △河原涼 六五丁
△山鉾 △菊水鉾 △放下鉾 寺
△舟鉾 △笠鉾 △岩戸 △吉出山 △孟宗山
△郭巨山 △孝婦山 △蜘蛛山 △白楽天山
△太子山 △木賊刈山 △芦刈山 △山伏山
△花盗人山 △天神山 △鶏鉾

十一日
△御躰御占 六五丁
△月次祭 六五丁

十二日
△神今食 六六丁
△解斎御粥 六六丁

十三日
△祇園會 六七丁
△竹里鳴祭 六七丁

十四日
△津嶋祭 六七丁
△芦御輿 六七丁

十五日
△熱田祭 六七丁
△祇園臨時祭 六七丁

十六日
△江戸山王祭 六七丁
△冨士雪解 六七丁

十七日
△嘉祥祝 △嘉定喰 △嘉定錢 △かづら 六七丁
△志渡寺祭 六八丁
△外宮御祭礼 六八丁

十八日
△相国寺開闢法 六八丁
△御灸夏神祭 六八丁

十九日
△内宮御祭礼 六八丁
△厳嶋祭 六八丁

二十日
△賀茂宰洗祭 六八丁
△紀涼 座頭涼 六八丁

二十一日
△鞍馬竹切 六八丁
△上難波御祓 六八丁

二十二日
△稲荷祭 六八丁
△座摩御祓 六八丁

△愛宕子日詣 六九丁
△天満天神祓 六九丁

五日
△天槁立祭 六九丁

晦日
△節折 六九丁

△水無月能 六九丁
△鎮花祭 六十丁

△大祓 △夏越 △禊川 △夏祓 △水無月祓 △草 △菅貫 △あさ虫葉流
△道饗祭 六十丁

△川社 六十丁
△形代 六十丁

△小蠅の神 六十丁
△茅の輪 六十丁

△上賀茂水無月能 六十一丁
△住吉御祓 六十一丁

△唐崎子日詣 六十一丁

月令

此部ハ六月一ヶ月日の定まりたる吏とのみ也

△土用干 六十二丁
△虫拂 六十二丁
△施米 六十二丁

△雷鳴の陣 六十二丁
△香薬散 六十二丁

△夏節 六十二丁
△霍乱 六十二丁

△浚井 六十三丁
△三伏 六十三丁

○九夏三伏　六三丁
△水掛合　六三丁
△篭抗　六三丁
△鴛鴦涼ー　六四丁
△汗疣　六四丁
△簟　六四丁
△清水　清水の源　清水せく　清水くむ　六四丁
△雲峯　六六丁

時令　此部こゝ六月一ヶ月の時候をかゝる事と心ふべし

○土用　六六丁
△夕立　白雨　六七丁
△露涼ー　六七丁
△夏露　六七丁
△風薰　初夏　六七丁
△青嵐　六七丁
△暑　溽暑　蒸暑　炎天　六七丁
△日盛　六七丁
訪暑状　六七丁
同報巻　六七丁
○萬鬼行　六三丁
△竹婦人　竹奴　脚馬　抱だき　六三丁
○潔取　六三丁
△船遊　六四丁
△白袋　掛香　六四丁
△泉　泉殿　涼殿　六四丁
△清水　清水せく　清水くむ　六四丁
△涼ー　涼風　六四丁
△納涼　六四丁
△晩夏　夏ゆき　夏の別　夏の名残　夏惜　六四丁
△夏の名残　夏の後　六四丁
△残暑　秋を隔て　六四丁
△秋近　秋を待つ　秋を待　六四丁

草木　此部こゝハ六月一ヶ月の草木の類をあつむ

△百日紅　六四丁
△苘麻刈　六四丁
△苧麻　六四丁
△麻　麻刈　麻の糸　六四丁
△綿の花　六七丁
竹皮散　竹皮脱　六七丁
△烏扇　ひあぎ　六七丁
△玉替花　六八丁
△鱗草　六八丁
○猫児眼睛草　六八丁
○馬鞭草　六八丁
△蒲春雛　六八丁
△鬼尾　六八丁
△釣鐘草　六八丁
△夕貝　鈴の花　六八丁
△ひく　六八丁
△南陸花　六八丁
△鷺州　六八丁
山慈姑　六八丁

△蒲穂　六ノ卅丁
△緑豆　六ノ卅丁
△赤草　六ノ卅丁
△河骨　六ノ卅丁
△蓮花　△水芙蓉　△池ノ艸　△蓮ノ実　六ノ卅一丁
△荷葉　六ノ卅二丁
△蘭刈　六ノ卅四丁
△菅刈　六ノ卅四丁
△稲茂　六ノ卅四丁
△田草取　六ノ卅五丁
△林檎実　六ノ卅五丁
△青鬼燈　六ノ卅五丁
△蓑荷子　六ノ卅五丁
△凡蘭　六ノ卅五丁
△羅摩　六ノ卅丁
△芡実　六ノ卅丁
△慈姑　六ノ卅丁
△菱花　六ノ卅丁
△蘭の花　六ノ卅四丁
△庵草　六ノ卅四丁
△藍　△あゐ刈　六ノ卅四丁
△青田　六ノ卅五丁
△芦茂　六ノ卅五丁
△早桃　六ノ卅五丁
△青蕃椒　六ノ卅五丁
△凌霄花　六ノ卅五丁
△汐見坂　六ノ卅七丁
△神馬藻　六ノ卅七丁
△瓜　六ノ卅七丁
△豆　△小角豆　△青ささげ　△十八ささげ　六ノ卅七丁
△甜瓜　六ノ卅七丁
△瓜皮　六ノ卅七丁
△白梵天　△梵天瓜　六ノ卅七丁
△干瓜　六ノ卅八丁
△熟瓜　六ノ卅八丁
△菜瓜　六ノ卅八丁
△南瓜（秋）　六ノ卅八丁
△南京瓜（秋）　六ノ卅八丁
△阿古陀瓜（秋）　六ノ卅八丁
△糖花　△紙もき中　六ノ卅九丁
△紫蘇　六ノ卅九丁
△蒜根　六ノ卅九丁
△胡荽　六ノ卅九丁
△麝実　六ノ卅九丁
△夏切茶　六ノ卅九丁

種植

穢ゑ。塵埃　水とそく。ろう地　六ノ卅九丁

生類

此部はい六月一ヶ月のいき物とあつそしらす

△蟋蟀　六ノ卅丁
△蟬の法声　六ノ卅丁
△蟬脱　六ノ卅丁
△空蟬　六ノ卅丁

△夏虫　六ノ四十丁
△金亀子　六ノ四十丁
△蠑螈　六ノ四十丁
△練雲雀　六ノ四十丁
△鶏鷹　六ノ四十丁
△川狩　△そで　△四つゝ網　△拾網　△ぼう網　六ノ四十一丁
△海月丸　六ノ四十一丁

△残蠅　六ノ四十丁
△鳥毛虫　六ノ四十丁
△蟶蟷　六ノ四十丁
△蟄雲雀　六ノ四十丁
△鯖鈎　六ノ四十丁

必用

此部ニハ風雨占日取のほか料理献立其外重法の事を記

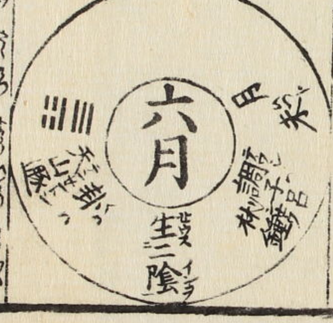
△飧飯　△水飯　△洗飯　六ノ四十一丁
△糒　△乾飯　△引飯　六ノ四十一丁
△瓊脂菜　六ノ四十一丁
△納豆仕込　六ノ四十一丁
△奈良漬製　六ノ四十一丁
△水の粉　△菖蒲水　△振鄉水　△砂糖水　六ノ四十一丁

△冷索麺　△冷麦　六ノ四十一丁
△瀛鱠　△せにし　六ノ四十一丁
△醤酒油造　六ノ四十一丁
△ひしほ造　六ノ四十一丁
△麻地酒　六ノ四十一丁

六月之部

△印あるハ俳諧の季と持りのく

陰ハ上天と地下ふまて此時陽氣盛ゝ其時令ふ隨ひて仁慈と行ふ



異名

△旦月　△朔月　△陽水　○庚伏　○亢陽　△季夏　△晩夏　○往夏　夏末　△林鍾律ノ六月ノ　△ぜミの羽月　△風待月　△水無月　△鳴神月　△常夏月

異名註

△旦月ハ亦雅　六月と云とあり　△朔月　且と云　埼山井ニ出○陽水是詳ならぬ疑ら　くら賜冰の誤ら　○庚伏六月ハ火旺ニ金火と畏る庚日心を伏せと　いふ依て名・付○亢陽ハ旱ゝ　○季夏ハ夏ゝ人の夏ゝ　○晩夏ハ夏ゝ　○往夏ハ夏ゝ　○往夏ハゆく夏

△林鐘は林に飛び鐘は聚まる事なり物のさかりなるとなり

○鐘と鐘とをやーの加○をぐ昏と誤へとなり△風待月風の稀なる月なれいなり△水無月水なと云暑さ△鳴神月雷多故名

莫傳　漢名月

風なけれは波なき海のごとくなれ

藏玉　ところ月

ちりそこひ妹こうとぞ夜の月待えるなる花のさかりなる

同　まつる月

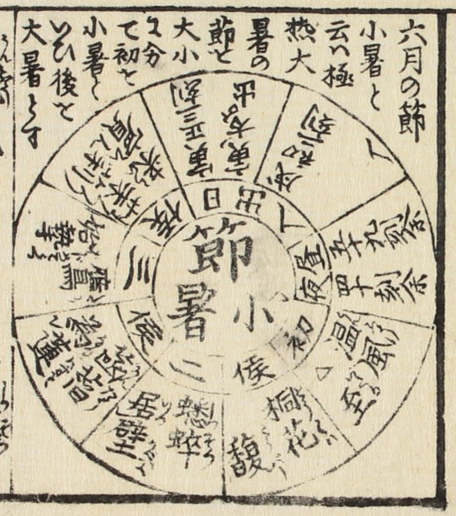
をたちを夏なる山のくふうは松風月のタなきそなる

秘藏　いそぐ月

おくきぬ古へこひてころるへいをくる月なるわるえとて

節

七十二候。卅木七十二候。日の出入。昼夜長短と記し註と加ふ



六月の節小暑と云は極熱大暑の節なり大小二分にて初と小暑と中と後と大暑となす

△温風は風もあてふ吹とも○蟋蟀きりぎりすなる秋の氣近くなりしか

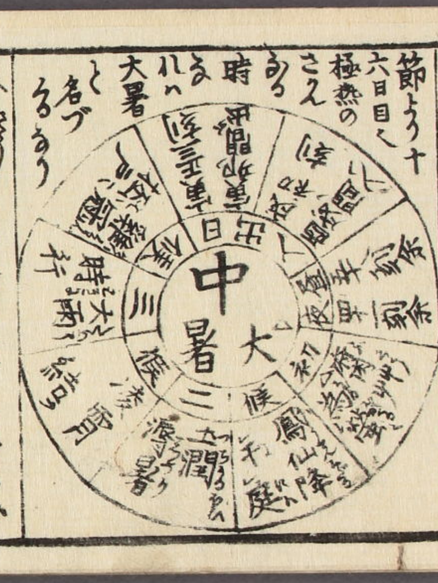
○鷹始鞲とは鳥を取る学と

○鷹始鞲とは鳥を取る学と

秋の金氣迫つくの人自然に感じて鳥を取て殺を事をなす氣動也○蓮は蓮の花の名なり蓮は実の名なり○桐花は此月香しく咲なり○茉莉は日本にはなる花なり慶長十四年島津家久佛桑モリ花を献せし事なり

中 〈大暑。七十二候。艸木七十二候。晝夜長短。日の出入尊左に記す

節入り十六日目に極熱のさえる時



腐草螢となる 腐れる草く暑ふひされて螢と生ずるなり。本朝は中夏か盛んと和漢ふ一くの時候のちがいあるものなり。

土潤ふて蒸し暑 此時土用なれば土潤ふ蒸し暑くもうなれども火の盛んなるふ一そらまして暑さ甚し一雨も此土用の湿氣を陽氣のさかんなるふりのりて大雨と降ことく。鳳仙花降る 鳳仙花の種を時へ。鶏冠花開く

日令

此部ハ六月日の定りなる事支の定りなるを記す。各の所ニハ板ことなるも大抵祭ニ同しゆえ

朔日

天氣 風雨 ○西南の風ハ虫ニ主る

氷室 氷室の氷ハ四月朔日ふ

○日蝕あ

九月盡まで献ずるなり今日此時御膳ふ氷を奉るをひのもとの仁徳天皇六十二年額田の王子狩ふ出ニなる氷室を見て土人ふ問なまく土を一丈余堀りて草と其上ふ薦氷を敷さしれば極暑ふもこけずと申す王子この氷を取て仁徳帝ふ奉らせるこそその始て民間ふ是ふ倣ひて

〈氷餅を祝ふ 俊成

今日ふ山方ふ氷室の氷を出すのけ一ふさい行そすゝき

詞 〈氷室の雪 氷室の清水 氷室の氷

板。氷の面はひろ〻見えす。板の下風皇の賢とこれ代の平癒。山下風冬士雪。宋源しき。花の陰る沢。岩。伶樹。山寺。いあし。面。夏は日。土さけてて氏日。氷室山。素のわ松が傍く

連 神やりう友や附るう砂うる 宗祇

俳 氷室山憑の素泊 日蔭茶 其角

賀春のそれぞ入れし砂解 十丈

氷室故事

凌人職

周礼ニ出氷室コレヲ群臣ニ賜フトアリ又左傳ニモ見ヘタリ日在北陸而藏氷西陸朝覿而出之トアリ

飯を供を

忌火の御

忌火とハ不浄の火を打ゆるこを内膳司より月次の御神事の食を奉るを大床子の御座まて供し奉る

獻醴酒

毎日ゐれを奉る

今のあまさけの事うり

前大納言

(芳) 年中行司

雀子代も子へとそるへん六月の

もふのこさみも君がまふく

一夜酒

今日造まへ明日ハ供

ぞる少名付るて

(俳) 呑め遊べけよハ仮

のひとよ酒 家定

京

松ヶ崎 氷室祭

祇園會鉾のち

で祇園社参

愛染祭

大坂 五寺

駿河

富士詣 今日より廿日まで登山するうり

(俳) 除雪のつりる〻る〻 家士洛謙亭

晴ていまこと曇り 家士日記 其角

安藝

嚴嶌市 今日より七月八日十日ごろとう芝居諸商人多く来り甚ざみさい

三日

天氣

雨あれば今月中

ふりはぐく 俗ふ梅雨

返りと

京

高雄 虫 千九日まで

江戸

本所 法恩

寺谷中宗延寺
法花千部 執行

四日 △六月會 傳教大師

忌日寺々行る○坂
枕御年 高と云こと有 江戸 箕輪

天王祭 五日 京 祇園會山 鉾まつり初 江戸

牛頭天王祭 大傳馬町二丁目東 六日 天覽節 宋神

帝詔して今日と天覽
の節と云人○不成就 天氣 晴

い秋收多し 雨 ○是い秋水
多し 風雨 ○是い米價貴し

制衣神麹 今日も製するふよ
本艸ハ五月 一ろし 本艸ふ委し

水貯 此日水を取淨き甕に收め
貯ふ 一年と越しても

らず此水にて醋醬油又い漬物を
どもれば一年過ても壞ずとも

京 祇園手水の井と開く。烏
丸三条坊門の南にある井に

今日より十四日まで蓋とり
きため引 松立 往来の人々

水むすび 七日 △祇園會三社神輿今日卯の下刻
はらるる

本社より祇園町を四条寺町
御旅所ふ十四日まで御出ふ

○七日より十八日まで四条
河原に夕涼みあり是て

△河原ちゝと

俳 祇園會を何山彼山人の山 保友

狂 引て来るとかれい通ふ山鉾よ
うりや祇園の會者実雖て 行風

山鉾 卯下刻四条高倉より
寺町へ出松原迄下り
より東洞院へ長刀鉾函谷鉾月
鉾行て自分の町々へかゝる菊水
鉾放下鉾船鉾笠鉾岩戸山占
出山孟宗山郭巨山琴破山蟷螂
山白楽天山太子山木賊刈山芦刈
山花盛人山山伏山天神山雞鉾

江戸　神田天王祭　南てんま町御出○品川天王祭　両社の御輿中の橋のうへふて行合南北へ分る故に行合の橋と云

八日　江戸。浅草天王祭

九日　京　北野天満宮九度祭　東向の観音堂より祭詣る　江戸　鳥越明神祭　隔年子寅辰○千住橋の上にて綱を引合　年豊凶をうらなふ事　十日　御躰之御占　今ふさを神祇官の官人主上の玉躰に御けゝ〜みあらん事と占ひ奏もう

十一日　月次の祭　十二月ゆもあり　諸神へ御幣を奉り　神今食　伊勢太神宮と勧請申さぬ天子ろろく神膳を供せさせのくとゝ　年中行事　入道大納言ゑあるて今をかゝるすゑよりゝ　朴もめるよのとゝろを初ろん

京　松尾神事能　十二日　天氣　今日烈風と書と邦芳譜ゐ出ろう　解齋之御粥　日の御座ハ大床にて畳盤一脚を立御粥あゝき土器に和布の御汁物とそろ〜まさう三口を出されて御器をろるとあり

京　祇園會山船引初　十四日　不成就日　大寺三村明神祭　△祇園會

京　卯下刻山鉾三条東洞院より寺町へ出四条へ下りそれより西へ行自分の町々へ帰る。橋弁慶

江戸　神田牛頭天王神輿小船町御旅今日ハ出十二日ゐ

諸神へ御

山八幡山悪ふさ山宇治の合戦浄明寺来る所ここの役行者山
かりくるゆへあり山ここへらへと
つる心ゑそ甘さる山の名なり
鈴鹿山鯉山観音山鷹山黒主山
船鉾○赤刻神輿三座御旅所四
条寺町より西へ渡りの人必将井の
神輿三座ハ四条東洞院より上り
二条と西へ御城の前と大宮へ出三
条大路を御神供社へ至り人
三条黒門通の角あり二座の神輿ハ四条を
をぐふ烏丸へ出それより松原へ
下り西大宮迄行地へ上り三条御
神供所ゑ至り三社の神輿一所ゑ
會しゆへ此所ふて神供と奉る日今
奉り一千團子十台
諸人ゑあそへいそうむそれより行列と
改め三条を東へ寺町を四条本社へ
還御(俳)ふくやまて生るぎ丸
の会ト琴へぎおんをやせんぎ
まちくゑりの山曽呂利 江
戸 亀井戸香取社祭 大坂 難波村午頭天王祭

近江 △竹生嶋祭今明日○山王祭渡り初 尾張
△津島祭○今明日 十五日 京祇
△芦御輿△熱田祭

園臨時祭 勅使立あづまあそびを
奉らると公事根源ゑあり
ゑへられも今ハゑへて○浄花
院垂拂○吉田小角豆祭 江戸 △浅山王祭 礼隔年酉卯巳未
酉支の年入祭の初りの笠ふこ
年出る所百三十余丁ゑり
○赤坂氷川大明神祭 隔年
○浅艸観音参今日びんさゝの神事
○芝浦小鯛網で下を今日迄ハ禁制く
大坂 三津八幡神事 旅所今○天王寺
講堂蓮華會 午の刻
富士雪消 今日ゑり富士
の雪消るといふ

(六月) 万葉
神のゆるゝ月のもいとなる月の

ものなるべきいその松ゆ
連之て詠ゝ一見ゝ夏のふの雪肖柏

十六日 嘉祥祝 〈嘉定淪〉〈嘉定錢〉〈かつ〉〈仁明帝の時〉
豊後国より白亀を奉る吉兆〉〉
て年号を嘉祥と改む一説ゝ
同帝の時御代の栄を賀茂ゝ祈ら
せらふ今日吉日へして御祓あり年号
嘉定と改るとあれども実記見ゝ寺
一説ゝ室町家の納涼の遊ふ
楊弓を射て員〉るゝの嘉定錢
十六文を出を嘉定い宋の年
号十七年まで毎年錢を鑄と
〉先年毎ゝ出ゝ〉〉あり此元年
〉〉の錢十六 袖直 〈袖留〉〈ゝ〉
文を用ひゝ〉 いへ男女
〉〉今日袖をとめるゝ振袖を着
〉〉座鋪へ出て父母ゝまゝへ
盃をいゝ〉き乳母るゝ〉〉〉盃
事あり其後留袖を衣て月の

出ふを見るゝ〉〉れゝゝて月
見の祝儀〉〉〉〉故実〉〉〉御
作法ハ猶
故実あり 伊勢 〈外宮の御祭礼〉〉

讃岐 〈志渡寺〉 参十五日〈十七日〉 筑前 〈博多〉〈祭礼〉

十七日 京 北野東向観音開帳十八日
〈相国寺閣〉〈戒法〉〉等
持院虫干〇か
〉〉川夜宮参 大坂 御霊 〈夏神楽〉

伊勢 〈内宮〉 御祭礼 安藝 〈歌〉〈島祭〉

十八日 京 祇園御輿洗 今日み
〉〉〉〉おゝ奉る〇山嵜
宝寺観音開帳〇桂川神事能
并大二果山門のゝ〉〉〉執行す

江戸 四谷天王祭 隔年也卯巳未酉亥の年〉〉〉

十九日 観音今日成道

の日 京 〈賀茂御手洗祭〉〈乱〉〈京〉〈十九日〉〈豊日〉〈座頭〉

の納京○清聚菴しゐ人寺へ五重ろ
俳　月ゆとゑ風ハ産及の涼ハ　熱口

狂　座沢流涼しきを
てしてそ平ゑ弱まろ　宗増

光日

天氣　今日雲ろうゑれ
ゞ豊年のゑ色ゑ

京△鞍馬竹切　當所の土人茶堂
と西観堂と両所ゑ集り西方ゑ
青竹と丈弁ゑ切と立置本堂ハ近
江方観音堂ハ丹波方ゑて一山の院
主大法事と行ハ終りて双方相ゑ定
声と合て彼大竹と三ふ伐て七曲の切石の
りゝ走りゆく早き方て勝ゑ寺夜
ゑ入て奇怪の事ゑも多くありゑぞ

光一日

大坂△上難波祭。ばんろう町ゑ
仁徳ゑ皇の御祭礼ゑ伝ふ
祭ゑとゑ社　内ゑ宮　稲

光二日

不成就日

京　櫻の尾
虫干　七日まで

○水無瀬後鳥羽
院御影　御開帳

大坂△座摩宮
御殺

座摩ハ祭る神五座ゑ神輿ハ御渡り
の道筋ハ朝辰の下刻ゑ出ゑ
本町へ出堺ゑ高麗橋へ出ろ夫
ゑり東へ大津町のむゑび所へ入ふ

同ゝく申の下ゑ同ゝく
久太郎町へ西へ出ろて還御ゑり

光三日

京　松尾神
事能

光四日

京△愛宕千日
詣　廿三日の夜ゑり

参詣ゑて諸人あとゑ山
へのぼりゑ　○東寺
後宇多院御忌并弘法大師像
開帳　今明日ゑ　○松尾神事能○要法
寺虫拂

光五日

京　黒谷虫
干

江戸　芝愛宕祭

○本能寺虫干○誓願寺
虫干○妙顕寺虫干

江戸　亀
戸

天満宮神輿舟ゑそ竪川ゑり一
の橋ハ川口まで渡御此所ゑて
名越の御
殺ゑり

大坂△天満天神宮
御殺朝巳刻

神輿二座渡らせ給ふ天神橋通を大川をゝりの濱側へいて難波橋まで是より戸ゝ出ず大川へ船びを島おろしの宮へ入り夜ふけて還御

丹後　○切支丹文殊會

越前　日永嶽參詣　今日八日ゆゑ常の參詣なり

京　本國寺　虫干　大德寺　華嚴會

京嶋原

住吉祭　○妙心寺方丈虫干　○加茂水無月祓　今日より毎日まで

大坂　玉造稲荷夏神楽　○内平野町神明同斷

晦日　不成就日　**天氣**　風雨あるべし米賤しかるべし南風い虫を主る

節折　竹をそなへ主上の御しるしの寸法をとりて其ゆゑを折あてゝいよゝとりとゝなりよとりの命婦宮

主を仰せて御祓をつとむるべし

鎮火祭　部下氏の人火を打て宮城の四方の隅にて祭事火災をふせぐなり

道饗祭　是も都の四方にて鬼魅の他方より来るを入まじきゝを免ぬ路上に供物をそなへ祭る

大祓　昔は百官ゝゝく朱雀門に出て祓をなす麻の葉を切て祓すゝやゝ麻を祓草といふべし○此水無月祓の説多し春より夏にかけつゝは春の木夏の火にて木生火と其外も皆相生なれども夏より秋にかけつゝは夏火秋金火尅金と尅をるゝ祓ふとなり然ども土用四季にあつて夏の土用を以專とす是中央土用の位なるゝを以てなるべしおいてい

五生金と相生ス○按ずるに九夏三伏のあつきハ邪鬼のごとくなれば〻そこいさよふて行年の半を守るべしと此月祓をする由なり△夏越の祓も夏越の暑言なり○つぎの詞の処よ委しく

(詞) 年中行事音合

長ひさの麻の六月さとうそへ奉るこの世きの世きの世祓をそこ

続古今　夏祓　家隆

ながれて流るゝ麻のゆゑ川　世々のよとよゝそさ方つゝん

玉葉　名越祓　兼行

風さゞる河瀬の波は長さゝへ　ゆくすゑとうけて神そ流しける

千載　六月祓　季通

ゆふられい麻の五祓ふゆふられて　夏ゝ夏月の四祓をそこと侍

夫木　夏神楽　公朝

河社あのようゝへあきうこの　神つる妹も祓をそする

堀川百首　河夏祓　成行

四祓川小祓文ゆるゝ麻のゝ　よる波のゆるゝふかゝ秋の祓

同　荒和祓　仲実

八百万神もはこふなしくらん　ゆふとうゝゆゝのこゝをそこつれて

○荒和ハあらゆる神を和らぎ鎮る

(詞) 行幸。秋風。麻の系。若系。若丹大海。沼。縄。川浪。波。宮。月日。里。村。國

△荒祓川△夏祓△夕祓△夏祓△麻の系ふ流　ゆゝの社　水の川　△祓麻　△祓麻の系　具ん　荒和は

(連) 祓とる水い心のちるとしるゝ　宗祇

(俳) 夕そよぐ四祓そ長ぐそや　小長

あるゝ手さくらを離さ友神ふ　其角

長ゝと長ふゝと長四祓ふ　凉帋

(狂) 夏の祓と長いとりさうい色の

長中だのそゝふする小　淡路守宗増

川社　夏祓ふ川辺ゝ棚を構へて神をまつるなり

形代　△撫物。御祓とする人形を作る　「と右人形てるで身のさいな

んと後の川　小蠅なし神　蠅の
よるぞすく　ごく悪邪多さといへ日本記ゆ
いづ是も夏の熱邪をいふなり
狂　さてさて寺あり人神もを　いをへて
今日の名御のそこしんとぞする

茅ヶ輪　午頭天王蘇民将
来ゑ教へゆ　遺風
疫疫　時是とかれい災難を逃とん
能　振り袖と結んで儀る　茅輪　翁詞

京○上加茂氷無月能
○建仁寺泉涌寺布薩戒

江戸　○浅草寺花講
△佃島住吉の御殺

大坂　△住吉御殺　所々うり物
撫の挑灯　いろくのかざりに
手とはふ〜て渡る午の刻頃よ
りとれるどろ鷹島師社人社僧神
馬等かを限りもなく次弟の
列を守りてもろ四社の神輿

を祭奉る社務い車ゝて反橋
の本ゆ立るゝ神輿一社七度
ゆ濱ゆ出〜奉ゑ潮ゝそうひ
ゝうのひそれより堺の宿院の
御旅所へ遷幸あり神人のつと
と奉ゑ夜は入り神輿住吉へ還幸
其節堺より送る者住吉へ迎る人多く
火とともに寺夏昼のごと是を火替と云
能　ゑ秘図のゆく方や淡路島　嵐雪
狂　儀錢も祈〜ぞ長のそひ〜て
金と慈世ゑ　貞柳

月令

此部ゑい六月一ヶ月日
の定まりざる事と記す

土用干　△虫干△虫拂○書衣等寺
の中ゆ旨奥て去ゝ故ゑ虫干去
能　嫁今〜河の袖を土用ゆ〜　其角
様脳ゆ世を必づこの濯ゆる　全

京　妙心寺虫干○天龍寺虫干
○大徳寺虫干いづれも定日

近江

△唐崎　千日祭り御殺

施米 山寺の僧よ米塩などを公より下さる（参）年中行事

雷鳴之陣 三度高くなるの声

きゝ大将以下近衛の次将迄弓箭を帯し御殿並孫廂ゑ侯して天子を守護し奉る公事根源等ゑ見へたり

香薷散 暑氣の頃専ら用る薬方なり

暑氣のあるをそうぞと治を（朋）香薷散を飲ませて書基肩

夏節 小児の頭面よ無名の腫物いづるをいふ

霍乱 ○病の名へ△憂瀉

霍乱妙薬　陳皮生姜

水煎用也○ゆゝの根よゝ○芦の葉をせんじ呑てよゝ○たゞの実香需をせんじてのゝべゝ○又法ゆしとゆゝをぞゆつけてよゝ

浚井 曝井ともいふ△井戸替の事へ新井の義

ゆゝて夏日井を新よをれば温病をやまずと見へたりむゝゝ此月井水を替ゝとなり今ゝ七月ゝ井をゆゝさゝへふることなり

三伏 三庚閉日ともいふ夏至の後第三の庚ゝ日を初伏第四の庚を中伏立秋の後最初の庚を末伏といふ

くゝゝ本篇博物筌ふゝり

占候 三伏の内西北の風ゆれば極月氷り多ゝ○三伏ゝまりゞ熱すれば冬雪ゆゝし

○三伏の内嫁娶をれば夫ゝ○木を伐べゝ虫ゞむゝれゝ

九夏三伏 九夏ゝ夏九十日ゝ三伏の訳ゝ記也

萬鬼行　後漢の時伏日よハ鬼出るとて盡日門戸を閉あるひハ湯餅を作りて辟鬼と名づくと云フ○秦のころやしろ伏侯なりて祭をなし虫災を拂せぐとなし

水掛合　夏戲まとよ水辺抔よりて水かけ合をするといふ

竹婦人　竹奴脚馬抱籠をいざて竹の籠といざた或ハ足とりてせをしてしかしひふうりハなのなり

（俳）北よ吹ハ北ひくく弟嫁人勝英たき紙や妾かへてきのふ今ふ其角

籠枕　竹とりつて是とつくる竹細工の名地所多出を

漆取　うるしの樹ハ中心黄ゐしてかそし水ハ値て腐ると刀斧と以樹の皮ハ切目切かけをしてあけハ白汁滴て出し後壺ゞて黒色なり此汁を集めてこそおて取るなり近国ハてハ大和國吉野ハは多く此職あり組し筐ハて取る物ハ是湿漆なり塗ものハ用るハ奥州羽州下野より出る代セシメウルしといハ是上品なり吉野ハ銀朱ハ合をるれ用も越前至て下品なりとも色ハ日本を上品とハ唐土の塗ハなるゆゑよりめ故ハりろこ〳〵へ渡をそし駿〳〵

○此実より蠟をとるなり上品へ此の蠟ハ

鴛鴦涼し　此外月露なぐれても涼しとをれハ夏の季ヨなるなり

（俳）をしなるや夕ゆ桃の下涼ミ白成

船遊　(俳)　大名の我慢さるや　季州
　　ふあそび

汗疣　熱擂瘡　身うちよこるゑ元物
　　あせが　ぬるぬ

　　あせぶの妙薬　きう
　　いぼさうく

　　足の切口そこうてようく〇又
　　かゞの土汁粉あーてつけてよ
　　し〇又天瓜粉をはたあて妙へ

匂袋　掛香　(俳)　掛香や袖ぬ
　　においぶくろ　　かけがう

　　いさせる妻の灰　青炉

(狂)　そ袋も匂ひ袋のなくひくや
　　丁子からの中まこゑれそ　久清

簟　竹のあこる延ゑり暑中
　　たかむしろ

　　是さあさて暑をさる
　　なり〇又藤まてあこゑもあり

(俳)　さぶ治や近江表をなむろ其角
　　ぢ　　おうみ

泉　泉殿　瀧殿　泉と水の流をふ
　　いづみ　　たきどの　　いづみ　　ながれ

〇泉殿　水の流ふをひたのけづをに
　　たてる家之殿とい家の事〇瀧殿ー
　　瀧をこるなぞ瀧のそばふ建る殿〇

(宗)　堀川百首　永緑

　　弦ふくの袖をしく成ゆゝ
　　いづゝふ秋はもむるやみつん

續後拾　泉辺避暑　公通

　　岩のむを岩弦ぞ立さよゝ
　　下ふ裏もかよはざりけり

雪玉　水風晩来　顕季

　　夕ぶ雨よ弦ふ泉もをはまこゝを
　　志賀乃うゝ風涼ゝ

散木　對泉忘暑　家経

　　下くる岩のあれあうふ
　　あふこの風をかるくへもふ

月清　對泉述懐　俊頼

　　月はう紅ふ志こかうなる歌をい
　　玉井の水もえやい清免森

玉吟　深山泉　家隆

　　人いこたに清あい友ふ志ゝまてゝ
　　住うれよけれ山乃下ゝ事

雪玉　樹陰翫泉　贈左大臣

　　松うゝの岩ふ清あのむをふのい
　　ワゞ月ひゝろよ秋いこたゝ

玉吟　夏向泉　家隆

[illegible]

山家　向泉待友　讃岐

[illegible]

詞　増〻。湧く。湧る。出る。洩る。松陰の清み。岩よりもたる。万代と祈ひ[illegible]なる新も君をまつらん

[illegible]。蛙。本陰。山陰。谷。庭。[illegible]

[illegible]

連　本[illegible]

[illegible]

狂　夜[illegible]

[illegible]

清水

△清水が源　△清水むすび　△清水せく　△清水くむ

○石間のある清くとめる水と云源[illegible]

手[illegible]清水汲も同〻　掬

[illegible]

詞　[illegible]

[illegible]

連　[illegible]

[illegible]

雲峰

夏の[illegible]

時の間[illegible]

午[illegible]

[illegible]

次第小山下[illegible]

夕[illegible]

詩　夏雲多奇峰　渕明が詩

新題林　為綱

[illegible]

草菴　頓阿

この時ふつとめぐりあるもの
なれば…

連　各のあるまうすとき…
俳　おもしろかるべきもの…

…

時令

此部ニハ六月一ヶ月の時候ニめぐる事ともむ

土用

四季ニ寄旺ず三月六月九月十二月の節ニ入十三日ゟ土用の入もべて十八日なり四土用合して七十二日四季もべて七十二日宛一年三百六十日ゟ十九土用しいふも子より後ニ入る六日数ゟ三百九十九日ゟ入るも昼夜を合して正しくを…れいやゝゟ十八日ゟ土用ハ夏を以正しく何ゟ故ゟ春ハ木ゝ土ゟ木と恐て敬事ゟ…秋ハ金ゟて冬ハ水ゟり金生水相生の間ふ

…れハ感ゟる事ゟ冬も亦刺ゟ春の木ゟの間ゟて水生木ゟり是ふよりて春秋冬ハ土用の土事ゟる事不能故ハ夏ハ火ゟり秋ハ金ゟ其間ゟ土用ゟると…正しく九夏の火ゟり火生土ゟ土用を生し土用ゟり土生金ゟ秋金と生を一年の間ゟる…ハ中央の土一令と爰ふ掲ゟて五行の序とゟすゟのゟり

土用天氣

東風ハいつまても雨ゟり成ゟるのゟれハ土用ふハ空晴て東風久しく吹くも雨ふゟられ是と吉ごゟも白こゟくも…いハ然ゟとも久しく東風のゟふけハ終ふハ雨ふゟゟり

土用占候

土用中晴天つゞけば五穀豊年ゟり久雨ハ悪し夕立ハよし○土用ふ入三日ゟゟ土用三郎と俗諺ふハ此日と

土用中の天氣定まる雨ふることあるべし雲なき土用中の日和よりいとかんばし晴天なれば土用中日和は○稲の豊熟土用を專大切なり此節の日和うゝ暑強くれば虫生ずれば実のらず

瘧瘟疫　土用蒜赤小豆と共に水にて用ゆれば年中疫疾の患なし

夕立　凍雨暑雨白雨○雨の夕立の事は和漢の書に正理と理は本篇にくゝ出ずゝ龍のふるなどいへば妄説なり夏月いくばくの豆をとくを龍夕立のゝがゝ豆をとくを龍なるべしやはれ雨は地の水氣下より天に上りて陽氣散じてふり下るなり雨きの湯氣ふくあつまりて滴を下るが如し大暑の節に至りては天の氣とゝまるべき陰氣をなほざり高遠にあり其下に陽氣をなほざりくく陰氣のふるゝとゝまるべきまで上らざりて陽氣なくて散ずるゆへ長雨なり或は雲ゝふつゝ雲なりとも陽氣つよくしてこれを散ずるゆへてゝくく晴るゝ夕立にて暴雨ふるゝは地の湿氣陽に立ちまのがれ陰氣のうすきはばかれども下に立る氣をなほざりき時は中途陽中に水氣とどまり散ぜずゝる間に下より段くむしのおすゝと甚しきはゆへなり下るゝそれゆへなほ其水氣のなくなり集りゝる間のゝ降ふより一丁二丁の間もふる所とふる所あり其水氣の上るはものあるゝ山くふゝゆる白雲にて雲の峯と詠ずるものゝ是外ようこれ

を空さう出〜雲のアうるれども
左ふあらば水氣を陽氣うそむ〜
のゆさく次第ふ立上り下よう
段〜上を時ハ白き氣集りて
山ぎハの所次第ふ黒こゞくる是
いよ〜水氣の多く上るにより
てるれば雨ふる或ハ白雲ゆ〜中
天ゑて高く立上らゞ横へなび
けるハ雨ふらぬ其故ハ下よりつき
上を氣止むにより上り水気も
陽氣うそ散ぢるゆへ横へなびく
なり山ぎハの根をくゝふ〜ざ
るも上る水氣つきなる故なれば
つき上を氣なきふよう上へ上り
なるも散〜てふらぬ山林多き
所ハ水湿多きにより度〜
夕立をるなり山ありても元山ハ
水氣なし冨士山などハ山のふもと
より中途までハ材木あるにより
地中より水氣上り雲をかゝを

ゝいてくきふ雲ゆ〜山上へそゞ
山ゆるにより夜電光すれば
其方角より雨ふる是も水氣
の上るゝ水氣上るとゝ久くも陰を
ゝりふてハ上るゝとあさ孑陽ふ
むされて陽氣の如く上る其陽
氣発出るゝ時ハゝ火の色〜と久
ふを見るべ〜けゝりの黒〜と久
ぢも火燃ぢゞふて多くをあを
本性をあゝハてあゝし光も陽
氣の上るけゝりれぢ〜故ふ此ゝ久
ふ方より上るゝの烈〜き時ハ直
にふゝゆゝ雷なる時ハ翌日ふゝ

（亥）新古今　公経

家する屋のゆさ〜あるべき
一むら色やゆふゝらゝのゝを

千首　夕立早過　後拍原院

あゝかゝやたゞ附のまにゝ久ゝの
ゝゝをもさゝゆゝゝふゝまるすゝん

玉葉　旅夕立　伏見院

糸川ゝゝ〜ゆゝゝのゆゝ
ゆふぐゝちふ

神を祭るもへを衣う多山

續古　村夕立　知家

數ゆり火のけうてぬるゆふの
人をいとめわかをらの山りく

玉葉　行路夕立　基氏

ゆふ雨くさたゝなけいるぐと
われてそやうん夕ゝちの雨

詞　稲りわ。風さかく。雲はようのいる
ばよ。ゆるかく。虹のけいの夕立いそ
ぞ星人。立もゆりあへめさぐ村
ゆ。ゆくぐ。かさくんし。彩雲涼し

雨ぬゆ。山里

連　涼ゆとつくや夕立ぐ天ぼえ宗牧

俳　夕立は花のけ迎めくこ堂其角
〜夕立や白蓮なまくゆりぐ　仝

狂　ゆ〜立のふりかはゆ〜もゆ迷み
うけるぐんべき紙合ゆりる常林

詩　白雨五字對句　同上

竹怜新雨後
ユフダチノタケスゞシ

万壑驚雷起
カミナリ山ニヒゞキ

山愛夕陽晴　千峯鳴雨過
ユフ日ノヤマ〻クハイ　山〻ヲフツテユク

詩　白雨七字對句　詩礎

雲開星月浮山殿　喧雷霆
山上ノ宮殿ニカヾヤクヒカリ　ライノコエ

雨霽風雷繞石壇　抱殘虹
ライノコエイレダンニヒビク　ニジハレル

詩　白雨之詞　唐韓偓

猛風飄電黑雲生　風ハゲシクフラヘツクロ
ニナリタルヅ

雲々高林簇雨聲
ハサツト雨フリ来リタヅ二ノ夕立ヨヒサシク
ノケシキヲミルガゴトク作リタリ

雨休風又定　夜久
夜ヘデフツテ雨モヤミカゼモオダヤカニナツタル

斷雲流月却殘明
月ノホノミユルケシキヌヨクウツレ得タリ

露涼　つゆすゞし

涼〜の字を加へて夏〜ま

夏の露　けもの秋の露の名れを
夏の露とよむ又は

ゆべの神よ吉きたる躰をとよ

(三句)　千首　為尹

しげり行ゆ色のかぐろや吉づら
まさくるる森のしたかな

夫木　為家

夏草乃葉ゝ色のやさ中のあつ原
室のやしまのこゝやくかま

風薰　南薰。古文ニ薰風自南来とあり　六月ニ

ふく涼しき風ふう
(連)　風ふくるタタヤ浪のなさうり　紹巴

(俳)　帆をかける朝のさゝやかなる風　其角
涼茅生やゆふ風ふく野の秋　百川

青嵐　青東風。土用のころ　空一点乃ゝ

ふく吹風をいみうり
(俳)　鰯乃出ふく色きゝ者也　一鳩

(詩)　薰風五字對句

堪露飛尭酒　清暑澄潭月
月カゲニアッサウスル

薰風入舜絃　開懐累謝風
ヲンギ日クカセカヲル　ヲンギ日クカセカヲル

(詩)　薰風七字對句　詩礎

毫端蕙路滋　仙草　逐風輕
クサモメイクニウルダフ　カゼモテケル

絃上薰風入苑春　水亭開
コトノネノウヘニフレテキコユ　イケノチニヒラク

暑　溽暑。熇暑。極暑。蒸暑。酷暑。炎日。炎蒸。燻日。
熾日。掘日。炎熱。火天。あつさ。あつい日。

(三句)　新撰六帖　行家

水無月のてる日のつちのあつさ
あるとのあつい　ぢり遠くあり

新題林　通茂

蓮さいと消てゆくはぐ雪いと
とゝ乾日ゝまよる氏ところ

(俳)　ことしはけりくあつてもあつさ哉　寸
扇ゐる小西日の高しいつさい移竹
帆柱の祝よげ小名の暑さ小　一九

(狂)きょうも百倍あつき炎天
夕ふこそるまく私でゐる〜是燕
日盛(俳)日は長い牛乃
地獄やり日の夏　井雨

(詩)夏晝偶作　長孫佐輔

南州溽暑酔如酒隱几熟
眠開北牖暑気苦シム蒸ガタク酒
ヒテキワタレテ几ニヨレバ神気日午
ツカレテオボハズムヽク子イル
獨覺無餘聲山童隔竹敲
茶臼ヒル頃ニ寐タツテサメタレバド
コモレツカニシテ物音ナシ童
子ノ茶ヲヒク臼ノ音ノミ竹ヤブヲ
ヘダテシトナリニキコユルバカリナリ

(狀)訪暑日起居文　左ハ尺牘ナリ

不候大暑久違之儀
熇暑逼人
清涼福至
動定佳勝

水園一枝
謹献某物

亮ハ暑中清涼四ツ詰
聊訪問

而已
而已
而已

尺牘　各晉上中下

熇暑逼人　赤日流金○源暑
彭蠡○炎令灼人　審動定云(上)起
居平安○興起運寧○平生之
休暢居止之祥　多快慶幸○愉
然○欣躍○健羨
謹献○投

○送之○聊具㊤棒呈○献呈

○奉上

訪問㊤窺光震之志

㊥訪起居○報平安

校　同報答　左ハ尺牘ナリ

法体孫弟墨氣爲多多至勲

勞介使訪炎日被惠

新一捕魚蒸暑亟堪情不涉

魚醢一器幸饗供膳

登於苦坊家之客美味可賞殊恩

之客

嘉惠叔く加減冗別ら表なく

須謝

[illegible]西之人礼[illegible]云云

暫待来會

尺牘　昏替　上中下

勞介使傳命○走使

炎日燻

日○熾日○蒸暑

被惠㊤厚貺

嘉惠㊥被投○分賜

魚醢煎醤

○美肉

饗供㊤偶有客至共

適口㊥以饗客

美味可賞㊤口

美可愛㊥殆潤藜莧之膳

殊恩

須謝㊤拜而受之㊥愛我至矣

㊤九拜以謝

暫待来會㊤期顧

問㊥叩謝以面○待問尋

真瓜ヲツカフトキハ圃瓜ト黄瓜ト カクベシ異名ニハ玉質 氷漿 黄花 ト
アリ青瓜、東陵ナドハ瓜ノ出ル所ナリ
西瓜ノコトヲ緑蔓トツカフタリ○納涼六
襲清風 橋下流泉 又ハ披襟林下ニ
ナド、有ベシ暑ヲ避ルニ蓮葉ヲ取リテ
コレヲ杯トシテ酒盛リスルヲ飲碧筒ト云
棚ヲ結テ日蔽ヲ張蓋トイフ

△涼　△涼風　いづまも夏くす

(題) 夫木　野亭夏朝　為兼

初風さ面る麦畑のもとへをこ
そこそもわるぬ冊色のもとしさ

嘉元千首　山家夏　為相

[illegible]さいろくもとり[illegible]
まつより外の秋風のしるこあ

古今六帖

あしさるわ大君の風ふれは
しれもすくしきえぬうちか

夫木　樹陰如秋　仲正

ひふ絵ハ[illegible]
その[illegible]秋かとる

俳[illegible]
涼さや先むさ[illegible]
涼風や白[illegible]
城くのすしさや[illegible]

納涼　(題) 新古今　恵慶法師

紙扇の外面ふ[illegible]
もあ[illegible]

同　太上天皇

山里の[illegible]
ゆ[illegible]

拾玉　毎日納涼　慈鎮

[illegible]

建保百首　樹陰納涼　定家

[illegible]

家集　山陰納涼　梶井宮

世[illegible]
[illegible]

月清　松下納涼　後京極

蝉の羽におきそふ露のこかくれて
秋をゆとせる庵乃まくらかせ

續千載　森納涼　為氏

さゝしさは立をはらふ森かけの
秋風ちかき衣手のもり

(詞) 涼しき風。袖しき衣。水涼し。山陰。野にも山陰納涼をし出たる
よふまでの秋風かよふも。山下水。
若むせる。潭。玉。玉ざし　すゞしき
泉。しみづ。岩もる水。ましみづ。岩かね清
みづしみづ。さく人家。暑涼し。結ぶてに
水の家。風かよふ袖。かさゝさ。紀かやめ。夜をこすへし。松陰。本陰。あざ
蓬芦　風　山風。夕風。夕涼べき夕影。
松風。森の下風。月影にて涼しき　月の枝よ
海の山あか残月。家にまうる人　松風。
水の夕る。月の下。松かげ。森の杜
まつ人門　風水波はよせて　家のそくは納涼
すり扇。蝉　木の下風は衣をしきれても　せその声のをあつきとも　雨

あすぎて程すしくさへむ雨の名ごりの露をくしらとも
風のあさくの露の名れは木かげますむ　擷の葉ら
なりし秋ちかくるゝのをぞとも　竹

風の音　枝。楸。其　海辺。湖水。野。森林。
すゞしさん　ろくにも涼し。雲涼し。涼をとられ。
すゞし
暑を避。鷺鴨涼し

(連) 涼しさは夜へかなる本陰かな　宗砌
明ぬるや蟋蟀の夕涼を　宗牧
鶴も夕を声繁にも庭の松　宗因

(俳) 酒がすきさうやむ涼これ　其角
(武)舟に乗さるハまし夕すゞみ　仝
(名)人ハ行やう夕しう涼こ　稜竹

(狂) 前大僧正慈圓
旅の女も大路行背に夕をとくみ
ふる帷子の汗あらひしる

(詩) 暑五字對句

水退池上熱（ミヅシリゾイテチニヤウネツシ／イケモカハキホメク）	竹深留客處（タケハフカクシテリウカクノトコロ／ヒトヲトドムチクリン）
風生松下涼（カゼニヤウシヨウカスヾシ／マツノカゼヒヤヽカ）	荷靜納涼時（ハスハシヅカニナウリヤウノトキ／スヾシイクノハチス）

(詩) 同七字對句

雲連海氣琴書潤　水殿涼スミドノ

風帶潮聲枕簟涼　青琅玕スキトヲル

沙界樹涼晴作雨　着衣巾キモノニカハル

石渠泉聲暗流水　涼風来カゼキタル

詩　暑之詞

何以消煩暑端居一院中

アツサノタヘカタキニハシイ　眼前無シテ

長物窗下有清風ソコラウチハ

カフヨクト　熱散由心靜涼生スル

為空室モシリヅキサシキカサハリト

シテアルニヨリスゴシキゾ　此時身自得難更ニ

與人同ヨクク得心シタ世間ノモヤク

スル中ニハクラサレヌヅ

晩夏　夏深き夏果る夏暮て夏の別名夏ふ後る夏より後夏を隔る夏の限り　為家

宮　夫木

夏と秋とゆきかふ空の名残とや

そよそよと風の音ぞすずしき

秋近き　秋を待つ秋を隣　不来秋

連　あのびあぬ風の秋の色宗祇

秋ちかしなれぬ秋の色の表紹巴

草木

此部ニハ六月一ケ月ノ草木の類を載つむ

百日紅　紫薇花。怕痒樹。猿滑。皮をぬぐ故に

猿登る事を得ず故に名づく。

百日紅と猿もぐりは一類二種なり

苘麻苅　。白麻。市尾。皮を

こぐて布をとる

麻ようやくさけ安〜火

縄ようち砧のつるゝ

麻　△櫻麻　花の摘み以て挑ぶもよむべし
△夏引の糸○あさの事
△麻刈○俳諸に麻刈を夏とす
異名　漢麻。黄麻。麻仁　油を制して
麻い皮をとりたて糸をとる

寂蓮

(宗)　夫木
猿の女が心をし　さ衣居うる
さくあさまうあの下風

土御門内大臣

夫木
かうちやをあさの立枝のあらぬ
えれ未来よるけきい

(連)　あくるを花ぬぬさく麻宗祇

(俳)　初起は紡ぐ麻その加せさい徳元
初手とらく紡ひもるくて楊麻　文筐

苧麻　○和名かうむ　○真苧
かうそその葉のごとく
花青き穂をなすを○出羽最上
の産よ〜奈良晒を織るもの
是より東国西国おく植も織
内東南よりもくんで麻と作らず

綿の花　むかしは穀皮と
是を木綿とらく是紙のごとく
今衣服を織るふ木綿といい
古名と用ひるる神人の用
る木綿たもれも古来の言
中世民用専ら麻布を用ひ
今の州綿は桓武帝の朝ふ異
国より傳る唐土そい宋乃
末ちを植る本朝よりハ二百年
ぐらい遅〜其後種を失ひて
中絶〜たり〜を文禄年中に
種を得て諸国ふ植る○多田
綿花黄ふ実白く紙ぬうはよく
尤可けれども少る〜今これを
うんど○蝦手綿業ふ深きき
ざみあり白花ひて挑大きて白
然まれども挑少る〜○神楽綿
花白あり黄るるあり
生ず神巫の持ッ所の鈴ごと〜

是を植て大に利あり○佐利綿
い枝葉赤色を帯び桃多し昔
姑この種を得うり聟に望
めども種をあたへず聟憤恨
して其妻を去りしに依て佐利
綿といひるゝせうゝ○畑草綿
いその葉青色にて間々小葉と生を

家長

(ろ) 新撰六帖

あしまの大和さいあるかゝくの
うへて〜綿のたよふそなけう

竹皮散 △竹の皮脱とると云
ても李にるべし

烏扇 △ひあふぎ○本州に射
干と同物にて然も
花形ちがう莖葉なるく弓
の長さこれりの射干より莖
短く葉扇のごくるべし和名ふを
ひあふぎなりされども和名ふを
一種として射干とかゝをあふぎ
と訓るようり連俳にも

射干とかくあり

西行

(ろ) 夫木

蓮生いさるゆあれと庭の面
かゝすあふきのみてあるん

玉簪花 白鶴山大なるもの
と俗に亀ぶしと云

鈎鐘草 地参○紫花とひ
らく形鈎鐘の
ゝ又白花淡紫の花あり
(俳) 約束考はに付る名也 越人

麒麟草 高さ一尺ばかり
形弁慶艸に似る

馬鞭草 ○馬折○鐵笛草○
花ちら色にて穂の
ゝ六七月花をひらく

俊成

(ろ) 夫木

紫ぬるふ這ゆゝへるまつぐら
むつうしげなる世ふもとのあり

猫児眼睛草 澤漆○此
草の形

燭臺のごとき故。燈臺艸といふ
野に多く自然と生ずるなり

剪春羅　春羅。漢宮春。
眼皮い俗字なり
○さゝ〻さ眼皮。紅白さまゝの
花の大きさ銭のごとし

(狂)人のよふてくる屋敷いもとて
鉢花をいもてしもて
ものを

虎尾花　花白し　虎の尾
のかたちふ似たり

畫顔

○鼓子花
○旋花

(俳)屋敷　采橋きゝむ衣之芭蕉
屋白や賜いたく　鉢　魚左

(狂)寄ものの屋上りたちまちおそと
敷へ白ものや花の咲くゝん　藥卿

夕顔

蘆　瓢瓜
瓢の花く

六月頃白き花開く昼いたゞき
夕方に咲く故に名づく

(三)夫木　定家
いくすゝを方人の神うとよ
あ卯ふし絡をゆふれば
さ首　垣夕貌　為尹
あ紙さうの竹のあ垣未こへて
ゆふかうりむたのくなんさを

(詞)白粉。あのぐるまつ。くれそめて。ゆぶ。
垣根。妹ら。雀。離。光。うこゝる。咲て
うたへ人。うたのうれ。外面。紙の女。屋。
行器。伝言。紙袋

(連)夕貌のあぶかゝせる絵屏風　宗春
夕貌のをゆしき垣根　宗養

(俳)夕貌や一日のうち花の名　其角
夕ゆふやゆ白き結垣根かな　仝
夕貌に雑炊墨さ美人越人
(連)ぶき紅の白夜ぶしゆ
ひさうなくもも狂い寄り　正名

(詩)夕貌五字對句

幸結白花了　松虫声不去

寧辞圭月蔓除　暮雀意何如

瓢。味苦故苦瓢ハ對ーて かんぴやうと名づく形色有瓢の如く物ハ長ふくべなれを浪花木津難波今宮住吉わりに作るかんぴやうい皆炭斗かさるり一名盒盤葫蘆と云かんひやうといへハ瓢とかくべー瓢ハヒヤウの音ふゆ浮の意とまりて酒器ふ制するとも瓢といふく木ハ匏瓢ありかかさまりて酒器ふ制するる瓢簞といふて知べー

干瓢教力　新干瓢。土用中ふむきてゐす河内摂津ハ多ー　伊勢より出せども味おとるく

苦瓢。瓢簞。タ顔と一類はて別種ハ味ハ

夫木れく色ろくなる紅のあろを沼て多るる

商陸花　花白赤あり白花のものい根も白ー

山慈姑　俗黒ろくいふ花淡赤色此根解毒丸加ス

鷺草　花白く鷺ハ似ろ　○連鷺州ハ葉大ろ花白ーて鷺十羽斗飛ム形ハ似ろ　俗さゝなきや雀の咽と枝て之由光

蒲穂　○香蒲。穂の形鉾ハ似ろ故蒲鉾くいふ

蘿蔔　花紫白色秋実と生を

緑豆　花黄ー。和名やえろうくいふく

芡實　花紫。花の下に実ろびる生す

赤草　水草○正字地錦ハ花黄

慈姑。燕尾草と云

○形燕の尾ニ似タリ。根ハ白ク
ヨロヒ一根ニ歳ニ十二の子ヲ生ズ
○沢瀉トハ水草ニシテ古人乃
能偕ニモヨヲタリ誤ツテ
沢瀉の和名ハ水ニ
いヘてハもさうの名ヨ
能 ハりざうの花ニ
沢瀉や乃ち名し雨あり　野童

河骨　○萍蓬草　能 河骨や
捨ニ出ハ多ル夜半楽嵐雪
△五

菱花　○芰　○蔆　五六月　小
△五　白花開ク　夫木為家
ふるさとたくもも淋しき宵ハるる
菱ハるる雨やはるるくるるん

詩 菱五字對句

浅渚菱花亂
ヒトレ・ハナ・ナキサニサワグ
深潭荇葉疎
ミヅナミツニチラク

同上

詩 同七字對句

蟾影搖輕浪
菱花映浅流

詩礎

松葉正秋琴韻響
コトノ子ニ子ノアキカゼ
翻池上
イケニサワク

菱花初曉鏡光寒
アカツキノヒレスベレキ
小池清
スミイケ

詩 菱花之詞　唐　李嶠

鉾野韶光暮東平春溜通
影搖江浦月香引棹歌風
日色翻池上潭花發鏡中
五湖多賞樂千里望難窮
日ノ池上ニサシテ花ハカゲミノ中ヨリ生
ズルヤウナ五湖ニハヒレノ多キ所ニテ千
里ノ眺望
ヤムフナシ

蓮花　△そちす　△白蓮　△紅蓮　△水芙蓉
異名　△花君子　△藕花　水花　風露郎
△池見草　△露堪草　○蓮ハ
泥より生ルトモ清浄なり
性糞溺を忌む周茂叔ノ云く

菊ハ花の隠逸なるものなり牡丹ハ花の富貴なるものなり蓮ハ花の君子なるものなりと

㊋　文治百首　　西行

しるべなる月のひかりをやどしてはところをえてもさく蓮かな

夫木　蓮開水上紅　　千里

秋近く涼しかるらむ水のうへはくれなゐふかく色ぞみえける

山家　蓮満池　　慈鎮

そのかみの月やどるべき隈もなし池は蓮の花ざかりなり

㊍詞　白し。濁りにしまぬ。風かをる。蓮葉は露を結ぶらん月。蓮は露かかげ出ず　釈迦の蓮の臺。蓮の上にやどる。たかの池に生ずる。蓮は水をうて

あまよるを池の濁りに染ぬ。ふかき涼しさ体もまたはな花。

㊥　香をちらして花の香重き蓮は　宗養
濁りにも染ぬ蓮かな　宗因

㊒　出る夜やに敷かれても蓮は　其角
泥坊の影さへ水のおちどころ　仝

㊓　花瓶にもさして花とも知らずそれぞうそぶく　宗増

おまへる蓮の臺のほとりに生けやくもいれまし　種好

㊔　蓮五字對句　　同上

白蓮吹次缺（ハクレンスイシカケ）　稲花千頃外（トウクハセンキヤウノホカ）
香藹坐来清（カウアイザライキヨシ）　蓮葉両池間（レンヤウリヤウチノアイダ）

㊔　蓮七字對句　　詩礎

蓮花直撲青天色（レンクハタゞチニウナセイテンノイロヲ）
玉女常含白雪愁（ギヨクジヨツネニフクムハクセツノウレイヲ）
波廻片々青蓮出（ナミメグツテヘンヘンセイレンイヅ）
日落山々彩鳳飛（ヒヲチテサンサンサイホウトブ）

渚蓮愁（シヨレンウレフ）
上蘭舟（ジヤウランシウ）
識采蓮（サイレンヲシル）
採蓮舟（サイレンノフ子）

採蓮　崔國輔

玉溆花爭發金塘水亂流
花ザカリナル頃ハ水ノ派モミタレサワグ　相逢畏相失
並著採蓮舟
花サカリノ頃ヲノバサバ花ノチリ失ン
ヲオソレテチラスアイダニトリ遊ント舟ヲモヨホスナリ

又　明申時行

碧沼停寒玉紅蕖映緑波
白紅ノ蓮花ガサキテミドリ色ナル池ニウツルナシキナリ　粧凝
朝日麗香逐晚風多
花ノ色ハ朝日ニウツシ香気ノ薫シヲタルハ夕風ニヨホシテ游戯金鱗
出飛揚翠羽過
鳥ケフカキリナレ鳥ヒカフ
納涼依水榭還續采蓮歌
スミ所ハ水辺ノ臺ニアリウタヲツクツテタノシムナリ

曲池荷　盧照鄰

浮香繞曲岸圓顆覆華池
香気紛紜トシテ岸ヲメグリ圓ナル花ノカゲイケノオモテヲオホヒカクス
常恐秋風早飄零君不知
秋早ク花ヲチラヤブル蓮ト今ニナランコヲ知ラズシテナガメタマハントナリ

○金絲蓮　紅花金色の筋あり甚ダ珍ラシ○大紅蓮　花淡紅色芭蕉の花ニ似タリ花ありて実のミず○天竺蓮　花紅千葉一列ヨミ〳〵ク昼夜ーヤまず○蓮ハ子の名なり蔬菡ハ花ノ名なり茄ハ茎の名なり藕ハ根の名ゝ荷ハ葉の名ゝ俗ワカ云

荷葉

浮葉　立葉　藕荷　荷葉

あらい葉と荷といひ根を藕といひ花を蓮ゝ蓮縫水芝

夫木　定家

あさとりの三条の川の水の面に浮ぶ蓮の葉の風の宗祇

連　あさとりの三条の川の水の面に浮ぶ蓮の葉の風の宗祇

飛　ぼまれて水もものびろくすみ野馬

(詩)荷葉五字對句

緑水飯香猶依崖假松蓋
(ハ)ノ水ガキシフ・オホフ

青荷包紫鱗臨水羨荷衣
ハチスノニツヲツツム・ハチスレノコロモニヅキミレ

同上

(詩)仝七字對句

桃花尚憶當年宅荷花香闇芰荷
カヨウタリスルニフツサイノモ・ハスノカホリ・ハスノイケ

荷葉堪為卒歳裳
ハスノイケ衣ヲツクル

詩礎

(狂)君よとは呼れし花の蓮花葉に泥の味噌をはくだ貞古

(狂)田々八九葉散點緑池初
ハジメテ葉ヲ生ズ所々嫩碧絶ト平ニ

水圓陰已蔽魚葉イマダ若葉ニシテ水ノ色ト同シ然レドモ丸キ葉ハ奥ヲオホヒカクスゾ

合弱荇繞猶疎
合スアサヅノ水クサモ少ルリカバ二疎々トハヘテオホカラズ

半在春波底芳心卷未舒
ナカバハ波リテヤガテクビ出ベキキザシヲフクメリ

浮萍遊水

蘭花
○虎鬚草。碧玉草。燈心艸
○本ハ白イ多ク四月ニ

(狂)末摘川のるるなくや沖のあいきそ花、おりかひ一夜孫させよ

ちうちんを製するふ小刀を持て指を押へ皮をさいて燈心を出さそ凡六分ばかりうて燈心半分出るを上品とす

刈蘭

土用ゑ入て刈そうり畳の表ゑ用ゆるい備後を上品とす女のすぐまて此業をこなげむ一日ゑ二枚うつさる女い媒人ゑ〜とうり

席草 是い琉球とゝて同く畳の表ゑうつ

下品　刈菅　を五用ゐ入晴天にうかす二三日ふり上ざれば色よゝずタ立にあへど色あくさび入ゐ

(三)　百葉　皆人の笠高ゝて山を百葉あるその板も葺ん　人九

藍刈　夏ゐう二番刈い秋京都の産を上と

と根をはゞずゝて刈るゆへゆゑ色うゝ阿州ゆゑだゝて用ゆ多く作る其葉も大ゐう

(三)　新撰六帖　知家

刈藍の末ひの藍のそゝがれば　あくを深ゝいろぞまゝ

(俳)　俗系の外もをむらや藍畠　嵐雪

櫨茂　○秋い葉紅くゐゝ　ゐゝりくぢ秋の季ゝ

(三)　新撰六帖

ゐあ尺の色ゝもいそびゆぶゝちの　ふるゝ小舟ゝゐゝ

(連)　夕日ゐゝ紅柴柏色も　紹巴

(俳)　おゝみい櫨のゐあゐ鴉の尻　吉永

青田　六月青ゝ田い景ゝ物ゐり詩にも作ゐり

(連)　夜山のゐゝいゐゝ　紹巴

まゐ門田ゐ　紹巴

田草取　五月の処　(連)　ゐゝあひて江の水

蘆茂　(連)　ゐゝ

(俳)　ゐゝ菊ゐゝりて芦の葉ゐ素白

よゝあぞゐゝ　ゐゝの男ゐ　右二句　惠

林檎實　○文林郎果　来會

委ゝく三月の部ゐ

出ゐ五色林檎至て上品ゐり

(俳)　ゐふるゐ林檎ゐ独て西匠　其角

(詩)　林檎五字對句

艷和蜂蝶動　香帯管絃聞

早桃　(俳)　扇ふもものせてくゐ　貞德

ゐゝや　現女桃

青鬼燈 酸漿 草

俗ニ南蛮胡椒。又高麗胡椒ト云 秀吉公伐朝鮮時渡る故名付くう

蘘荷子 俗ニ夏あると夏めうが 秋生ずると秋めうがいう

凌霄花 異名 紫葳。陵時 夏ゝ秋ゝ花と開く

俳 のうせんのはなとりくのげ 風鈴軒

詩 凌霄花之詞 呉震生

素娥昔日宴仙家 素娥ハ仙女ノ名。酒宴セシトキ

醉裏從他寶髻斜 酒ニエフテ髪モカタフキタリ

遺下玉簪無覓處 髪ヨリカンザシヲオトシ尋レ共ミヘズ

如今化作一林花 今其カンザシガ化シテ花トヤ出シト戯作レルナリ

風蘭 掛蘭。仙草。風ヲ好テ茂る故ニ名づく

俳 風蘭や風一下つゝ業平忌 如柳

汐見坂 花黄色

神馬藻 鯛ゐい 歳旦ゝ

列 夫木 信貫

いくゝに治まるゆゝるゝものゝそのいそゝへまゝ

木ハ九月ニよいそゝへまゝ

豇豆 小角豆 青さゝげ 十八さゝげ。花白ゝ

俳 ぎうれ ゑもさゝげの拾ひ 半良 ゝけうえ大系ゆるゝ あをぐれ 江戸

瓜 種類多ゝ多 **甜瓜**

ゝく五月ニ記す

甘瓜。果瓜。美濃真桑村ニ作る瓜を上品とす これ ほうとう今

瓜の惣名とす 京の東寺

瓜江戸の鳴子瓜 尾州の青鷺

瓜を上とす 駿河の府中 摂津の水野 和泉の堺 舶の松 これら皆名と得たり

俳 習山 怪茶のゝゝ瓜の皮 其角

瓢箪小温公ゝろや素瓜超波

狂　爰つさてちぐりに毋一瓜自由
先へ高さい徒ゞ仇まゝ千栖
○人く集りて万法い空也と法
問を出せ〜時寂蓮法師〔あも
皆空よかゝべさるものゝ〜べいざ
此瓜よ皮も此
さゞ〜ちを名ろ

瓜皮

松山侯の御前

て瓜の匂い有べ〜皮うて發
匂せよとありける時其角畏りて

能　瓜の皮あも拾ふ流さ名ろ

白梵天

〈梵天瓜。瓜の種類にて白きく
大和より出る皆白色なり

能　梵天の瓜や味ふ香はさ紀　桂葉

狂　名を考へ紀切ぶり瓜面を拾ゞ
梵天瓜ぞよ人前つかり紀高壽

詩　瓜五字對句

酒榼縁青壁
几瓣梅福傳

詩　瓜七字對句　詩礎

瓜田傍緑籬　園摘邵平瓜
羽扇搖風却珠片　動金花
玉盤貯水剖甘瓜　鄭瓜州
白社可容陶令酒　故侯瓜
青門堪種邵平瓜　五色瓜

青門

瓜の名東陵〜〜
瓜ノ美ナルヲ出ス昔
邵平秦ノ東陵侯タリシガ秦敗
レテ後布衣トナリテ瓜田ヲ作リ
シトナリ

干瓜

白瓜を千てたゞ
出るといらくと小〜てよゝ
ど六七月出るゝ大きみて色青き

ものとうしきす大坂の東黒門と
いへ所ふ作る上品とす唐ゑ青
門瓜上品とする又偶然なるあり
(俳)干瓜やうりやうて干す簪小母其角

熟瓜 甜瓜の種類 味少し劣る

茉瓜 甜瓜の種を蒔て
茉瓜ふ変する物有

南瓜 (秋) 寛文
の頃本朝へ種を得て長崎ふ作
るそれより諸国ゑ広まる形ち
丸く初はたしまと南蠻よりも
きるとりつて南瓜の名あり

南京瓜 (秋) 南瓜と同種類と
形ひぜんそくそれとも
かぼちや唐なすびとも又をべて胡
地より其始出しとりつてなり

阿古陀瓜 (秋) 是ハ甜瓜などの
こく煮ぎりてくふ
○南瓜○南京○阿古陀等夏の
季とも考へう又秋の季とも
を通俗志其外多く秋ゑ
出せり○花として夏ゑ用ひ
花として秋ゑ用ひて可
なるべくん所存よるべし然
れども時珍が説ゑ南瓜をと
八九月花ひらきて花として季ふ
とあり是まで花として季ふ
五月とをとしのくもころ得
のくゑんゑくゑ記を

楮花 紙を作る草○楮ハ制
して紙ゑまる木なり
黒ひやうをふちい上紙ゑまる
つをかきといくるハ防州にて
多く作る白ひらう青ひらう
ゑまをとゑど其外数品あり
○秋葵といふる州あり楮とハ別
なり五月花咲くあひゑ同し

紫蘇 赤蘇○桂荏○塩漬ふ
して食ふ大小二種あり

蒜根 優こうてたくさん食毒を解し悪瘡を灸す

葫荽 夏実をとる生るい香あしされども悪臭をよく去香あるものを食して後この物を少しづつ噛むあるい香ふるもちん

痘瘡けがきを去る法 この実をせんじてかべるとそ、げいたちまち痘瘡の色あらきをもとる 和名 稿実 稿膠

稿樹の皮を剥き水よたぐ臣 稿をかきて代去りて制る

夏切茶 ○茶を賣處の家六月新茶を壷へ紙をもつて封じ壷ともに賣るなり是を買い封を切りて遣ふなり

種植 此部には草木植え壅培扱様をこの事とのる

種植 先月まるる仕分あるいは今月も蒔べ

茄子とる仕法 花の咲く時分その葉を取りて四ツ辻へ捨てるべしこれを丸く灰をかさあげて其上を人よぬまれ屋しをもびたくさんなるなり

壅培 擅たちぐる等の芽の実をる事ないし土用の後ちやーとかくべし ○菊まいの灰羊の糞をつちくい

灌水 此月暑氣はなはだ日中は水をそゝげいかまるく晩まいとそく朝いちやく水とそゝぐべし

扱採 麻苧○ゐ燈艸席艸。右の分此月刈ろ

生類 此部には六月一ヶ月の生るものとあり

燈蛾 燭蛾○火蛾○飛蛾○形黄蝶に似て枯渇をり云〻

蟬の諸聲　多くかまびすくなくといふ

蟬脱　一空蟬○蟬の皮とゐぎすの皮とぬくとといへども又生ずるものとも云ふ

夏虫　夏の虫とゐふ　(ヲ)新撰六帖　光俊

法よりく火つ入よりの夜むりやうん
ほの外出べき仮るうん

(狂)夏虫ゐ多る公のまいりとあつき扱ひよりつ所美さ貞因

殘蠅○蠅い秋まで物のこりあ　季ゐ六月条

金龜子　蛟蟥　蛣金　鳥毛虫　螟蛉　髯虫

蠓　俗ゐ水道蠅といふ夏に生じたるもの

蠐螬　一名地虫又根堀虫○おく土中ゐ生ず又

糞土中にも生ず　練雲雀卵

麥畠は中ゐ産むまりとひあ
ぐりそびんぐりてあうりとうる
かい直ゐいもこうゐ下らず先
五六間も脇旁ゐ
歩んて常のもとくそうを
入るゆへ網掻の禍ゐ○此頃毛を
かへてふるるとを
のとるを練雲雀といふ
○一説ゐ音を入るひぐらのるくといふ
(俳)菓ゐたのむ麦川志ゐて移り雲雀鋪雲

鶺鴒　たうふひぐらとも
るるまり暑中ハ
ひぐらの羽をかゆるころ
まれハ飛ことよく取やを

川狩　纏四つ手網　持網　撒網
等ゐて魚とり遊ゐと
ゐう大抵い鮎をとる事ゐり
(俳)川狩やうきいゐと汲て待梨里

鯖釣 青魚。其色青し故名づく 大なるものを鰆と名づく 和名あふさぜと云ふ海中にて釣る

海月取 海母 仲正

我恋は海の月をとりてくらげにわびにあくよりもとく

必用

此部には六月一ヶ月必入用の吏養生の法等を集む

破軍向方

暮六ツ 午の方	夜五ツ 未の方	夜四ツ 申の方	夜七ツ 亥の方
夜九ツ 酉の方	夜八ツ 戌の方	朝五ツ 丑の方	朝四ツ 寅の方
朝六ツ 子の方	昼八ツ 辰の方	昼七ツ 巳の方	昼九ツ 卯の方

日刻 未の日未の刻事をなす用ゆべし 月建

出行作事 東の方へ向ひて今月天道

東へ行くは故あり又西北の方へ行くは用捨あり味方よして西南は味方よし敵とすれば利あり

樂事 詩ふも六月徂暑と云ふ朝早く起出て見るに蓮の咲るは蓮の花る寺院の池清らかふ香ひふ折くは

天氣 流音

雲起りて夕立のけしきあり一陣ふりくるあとの木々のうるおひ

○水の寫ふ清く心もゆくるる

當月は長雨ふる事すくなし雲出雨を催ぜども天の陽氣つよくして陰雲の氣消て晴ふかるると多し此月熊天氣よくは朝東風ふくと朝あしくして四ツ時分より次第ふ南へまわり西ふかるるをまぢとす此月ふき出せば雲も晴を照りて五穀豊熟

をそれより日暮まへより次第ふ
北へ昏り北東風ふかるるれを
夜北とゝへ昼の照つゝあと吹さ風
露をおゝ稲ふ甚よゝ此天氣
つゞく時ふ折々夕立
去て人病もをくゝ

風　申酉より

吹を西まぜとゝへ日和つゞきて
よゝ○未申より吹を沖気と
ゝへ朝ごとに曇まぜども日和つゞく
ものゝされども日々ふ曇り雨げ
まぜふるる此日和長きものゝ
其うちふとり出せばそれより
晴るかと却て人ば未申れ沖より
雲をのぞゝて雨とるゝくゝて
いづまふも長さ色はくものゝ
○北西の風をあぜといへ雨ふゝず
曇ぞ夕立もせぞ○東風はぐ
けて吹ば雨ふるれども夜露を
あげぬゝ○東北の風久ゝく吹
て空晴くゝると日和東風とゝよ

十日も北日も雨ふゝず然れども
終い雨ふるとものべゝ○東北
東南の風ふて曇まぜい

雲　南西

湿氣にるる下地なゝ
ふ白き雲出て東へるべくまぜ
雲とゝへ晴天はぐさ夕立など
まて稲
ふ宜し

朝霞　東方日出をるまへより

あゝ久ゝくさい是ひぐりはぐく
○朝東方あかく満天へうつ
あゝれい三日ふ内雨ふる
もべで朝ぜけを雨ゝへ翌

夕霞

西赤く南へ廻まぜ日和ゝ秋の
氣ふるれい北へまるるとゝゝ○
久ゝく旱の後山谷と
かゝゝすい翌日雨ふる

占候

此月暑氣薄けまぜい五穀よろ
かゝず蠅ふけまぜ新舊の米價貴
ゝ○白雲北斗の下ふ横さられば
雨とまる○月内西北風吹い稲ふ

挑あり○今月西北風はげしくして吹バ日和よし夕立もせず又この風あまれバ冬河凍りて舟の通ひ不自由なり○二十七日二十八日辰の刻東風を主る○東風久しく吹を好ず東風のこと吹て夜露をおろさず稲生長にわるし

衣服式

帷子を着る 袴ハ浅黄

小紋継上下ハ略義 縫子肩衣ハ厳暑を凌くためにて後製のものゆへ式礼の時ハ用ゆべからず

時衣

女郎花 衣さて青 ぬき黄

瞿麦 衣おもて薄青 うら青

女衣服

朔日より帷子をきる之上臈ハ絹ちゞみ或いハこと(じ)さらしのひとへものをめさるゝ

嘉祥は月乃祝儀ハ地うこんのきぬちゞみをめすべく

生

花之式正

百合 蓮

養生

心旺し腎衰へ精化して水となるよくはくして腎気をかなふべし 冷水にて手を洗ふことなかれ五臓をいたましむ沐浴又ハ冷水にて足を洗ふべからず風にあたりて臥ことなかれ生冷の物を食ふべからずすべて是をおかせば秋に至りて瘧痢を発すといふことあり病の此月に多きハ陽を受く発さゞる也是を張て驚くふなき

妙薬方

夏暑にあてられたると中暑とハ香薷散を用ゆべし○香薷大 厚朴。白扁豆。茯苓各中

○老人虚よハ人ハ清暑益気湯よし人参。白朮。麦門冬。五味子。橘皮甘草。黄栢。黄芪。当帰

○霍乱にハ藿香正気散よし

○時気にあたり又ハ食傷にハ枇杷葉湯よし ○藿香中 莪朮中 呉茱萸小 びやう大 肉桂中 甘草小

冬日凍瘡を發せざる妙術

當月をぐきて暑き日手足に塗れば冬、瘃あぐと發せざる事妙なり

大蒜をはさだらにて

厭魅抜し妙術

今月蘂と取り黒焼にして石灰と砥石と右三品を合せ壺に入て水と入米と入米のもろけ〳〵ろ時あざとう血を出ぐ〳〵はきて紙にてくること〳〵

鰻松明し法

蒲穂を二所油を塗り又切て油をぬりて又ぬすかぬりにをる事三四度〳〵して其上を鰻の皮にて巻又油をぬりて火をともしび雨中にも消る事さらに

六月飲食并料理献立

好物 温暖のものあるいかきものとろ〳〵ふる宜〳〵

禁物 生冷にて ひのもとるとゐむ。韭。野鴨。雁。あひると食へい水痢生を

△飛飯 水つかめ〳〵△水飯〳〵もかく△洗飯。飯と水にて洗ひ食ふ

(俳) あ飯まかるの瓜のもづく弘其角

△瀛鱠 せど

△精 △乾飯△引飯。冷水にひたして食ふ河内道明寺が作る物甚よし

△冷索麺 △冷麦。ゆで〳〵冷水にさらしたるすのこ

(狂) 山弘乞て麦白ふ見せん索麺の皿より使く餅の赤〳〵糸 梅子

△瓊脂菜 石花菜△心太 (俳) 赤〳〵糸のもろ孔つくさ出せ心太 沾風

(狂) 糸のもろ孔ところてんやのつ紀ぬ價せんきの素かし〳〵な 遠舟

料理

汁
やきあゆ 大こん めうがのこ
ひなどりの わくき ごぼう
もぐき さゝがき ごぼう
うし 皮ふぐ 一口茄子
やきさゞゑ まつ茸 みつば
めうがのこ 塩ノ あすび

清汁
すまし ぎん ごぼう せん
ひなご ふき 干大こん
こぜうのこ もぐさ 青こんぶ 塩煮

膾
さです めうが あぢ 大こん くらげ せうが
ささすで さぞゑ ゑび あを豆 ゆ
こすずで きくらげ あらい めうが 大こん
ゑい さより たで せうろ 大こん
こてずい みそ もぐき 糸せうが 竹の子 まめ

差味
あらひすゞき めうが 青のり
まるかつを ころいも しそです

煮物
のつぺい あわび そうめん ごぼう こんにやく 松茸
てんぷら 大こん せんぎ
ゑもだこ さゝげ さけの皮 うど ごぼう
あわびせん ゐさいのり くこ
ぎんなんすゞ つぶし玉子 つけなる

吸物
ぜいご めうが
やきふる しそ
ゑび ちうちのこ

精進

汁
里いも 糸菜
もみあぎ 青豆
書さゞゑ しそ
せんべいふ あげて むきく切 大こん さんざく
むどいさ ちくのや 油あそあげ
糸つまき ふき 白玉ふ うど

清汁
おまし おんさい けんちん
さんすりのこ うす切 あすび ころさけ

膾
もみ 大こん きくらげ あげふ めうが
ろろこすおへませ 白瓜塩ぞし せうが きくらげ めうが あげふ

差味
こんにやく 首ふろ いそくけ いとし菜
こそめくあへ あげふ きくらげ ミゝ おそ豆 くり せうが

煮物
さんせうそそ よせくるみ いゝふけ さくら 小口みやうが ひどらて
かも瓜 竹子せん さゞゑ

和へ物
うすのつぺい しやうきんいも あぶらげ いんげんまめ
里いも 大椎茸 ひめ干 ひきあぶす さゝげ
つけぜんまい 青まめ くるみ 糸さんせう

吸物
竹の子 ふき 辛あへ
上ヶあすび くろまめ 白あへ
さんしやう こやうがれて 木や
おめんさい しそ
いもまき うすミそ

六月食物用意の品

醬油造　納豆仕込　味噌造　奈良漬製法

右の品々はそうそうもうもう委しく日本歳時記といへる書に出そう

水の粉　葛粉水　砂糖水　祇園水　いぐまも夏の飯

麻地酒　暑中に呑酒なり美濃。豊後又い南都なども出る浅茅酒なり

（俳）解て云ふ紙きぐを移たるなら沼安成

干瓜の法

瓜を二つに割り中子と去り八九分に塩を入れ一夜をへてとりけをとり明日取り出し上へ下ゝかゝ久しく日に干べし

干茄子法

茄子をもう皮を去り二つに割りて干し用るとかれ水にもどして煮る

豆塩漬乃法

米粃一斗に塩四升合せ四五日さげをさゝぐ清をけば久しく損ぜず茄子も又此如くするもよし

甜瓜と

久敷貯ふ法　打綿と箱やうの物に入其中へ瓜をつゝみ蓋を能しめいとゝ紙にてめをけば百日い持る

瓜茄子の類年

尤土用の瓜よ

中貯法

寒の中の潮を壺へ入たくり入夏の壺瓜茄子の類を漬をけば色うゝすゝして久しく持つ潮い渚より五六丁も沖の潮よゝ汐いとゝうゝみはよくゝて悪ゝ

甜瓜年中貯ノ極秘傳

随分大瓜の藁より頭ノはさみたる形ニ着て穴をあけ其口ゟ明攀と二匁を入れ木灰ノ粃半分まぜて都合一斗ゟ入れ塩二升入るはりうそ漬置き桶ノてもつがゝそも口とゝゝ風の入ラざるやうにとべ〜今月漬をゝきて九月より未勝手ゟ出〜てつゝ〜べ〜味ひいさゝゝも撰ぶゝ事ゝ〜

酸將水子と貯法

色好赤ゝゝると枝と共に土用の井ノ水ゟ漬をゝ秋ノ至て又水を替べ〜かくのごとくすれば外の売紗ノ如ク透通りてやうゝゝ少も皺よゝ〜ゝ

夏月冰と寒中ノ如く搾る法

銅の器ゟ厭まで泡りゝる湯を入れ口を能はめ水ノ入らぬやうにして井の底へおろすと付て流め半日ゟ一日ゟ置て取上レバ寒中ノ冰ノ如くもかつ〜夏の内煮凍を搾るゟ葛粉ゟど用ゟ及ばど至極よく出来ゝゝ

又法

つぶゟ水と入れ堅くロとして釜ノ湯と泡ら其内へ入れをゝき湯玉のゝゝ時取上て井戸の中へ入れバ忽ち氷ゝなゝ

青瓜越瓜年中貯法

瓜を四ツ割ゟ干し一日置てのち新酒の樽ノ詰め張こめ置バ年中変らぬ時分の生ノ如くゝゝゝゝ

茄子瓜大角豆青漬法

五升塩

二件右二品りと合せ瓜大角豆
いろ〳〵と漬そくべ〳〵いつまでも色
青々〳〵て生ぶしと但
風のいつゝぬゝたるとべ〳〵

白瓜翌年まで青く貯置法

赤土一斗 塩六斗 五合右赤土ゝら砕きふるひて塩と一
斗と合せをきく白瓜二つ三つ入て
中ごとを能さ〳〵へ右の土ゝて
つゝ置べ〳〵来年
まで色かわらぬ

夏煮火凍そとる法

鯉ふな其外海魚ともに
精進物ともなまこ又い醤
油などふても煮る中へ石花菜
と四角に切りて立つゝく入よく
煮て鉢へあけ水に冷〳〵置て
用べ〳〵

魚肉久敷貯法

魚肉
の中へ胡麻の油を少〳〵入置ば
久〳〵を経ても臭かゝず

煮熟くさる物臭かゝざる法

煮たゝしくさるもの何
にても〳〵ず明日まで貯へ
置〳〵時い大かう雍覆の口ひろ
きものゝ藁の灰の乾きさるを
底ふき其煮さるものを碗よ
りも〳〵そうり右の灰に上ゝ置
雍覆の口とちへそれ布蒲團にて
おゝいその上ゝ平瓦をおりしき
て風とをゝさず氣ぬけぬゆう
にをれば土用の日盛りふゝ一夜
越て臭〳〵ざる扱明日取出〳〵先
鍋を焚熱くしてそのまゝ
移〳〵て煮調べ〳〵若ちづ〳〵ふ
てもとり出〳〵て油断をれば味
変をふる〳〵

唐納豆の法

京そへい浄福

寺納豆といへ土用前ゑ麥一斗
大豆一斗麥をば蒸し大豆へ
焚二品を能まぜ合せ土用の内
ふ糀ゑ拵てゑ四五日晴天ゑ乾
白そ拵いくさびを挽久し
縮ぶくひよりけぬうへさそ土
用中ゑ水八斗に塩二斗煮久
して能さめ此水そ右の粉を
まぜかへ入てちゑるなり
ちゑるふ口傳あり少づ入て
ぢくくさそ合せにぎりそふ
ぢくくさそ加減あしようやい
らうなるハ悪し是を白ゑ入さて
はさ桶ふ入て七日置て又つく
又七日めくふつゑ以上七度つく
八九月の項ゑ麥ゑ入るその時取
出して日ゑ晒黒く色付ぬぶ干ゑ
げてよかさ木の葉を上下ふそゑ右の
納豆をだんご程ゑちいさくして
べさひてよりもを見てかけるなり

三省

桜亭堂